

一通の手紙

第7回 言の葉大賞®

「私は一人ぼっちなんだ」

そう思ったのは、中学二年生の時である。

当時、私の学級ではいじめがあった。私は友達がいじめられたり陰口を言われたりしているのを見ているのが辛くて、私一人でも側にいて励まそうと、行動を共にしていた。その友達が笑顔になってくれた時は、とてもうれしかった。

しかし、しばらくすると、陰口や物がなくなるということが私にも起こるようになってきた。何とかしたくて、自分で考えられることは全てやった。その友達から離れることも考えたが、それだけではどうしてもできなかった。私に移ってきた悪口が次は別の友達に移っていったらと思うと、誰にも相談できなかった。家族にも相談できなかった。

ふと周りを見渡してみたら、私には私を分かってくれる人が誰もいないように見えた。一人で泣いているばかりだった。

そんな時、一通の手紙が届いた。私の母の同僚の方からだった。私の様子の変化に気付いた母がその方に相談したと思われる。

「正直者は馬鹿を見る、という表現を聞いたことがありますか？ 正直に生きることは傷ついたり、損をしてしまうことがある。多大な勇気とパワーがいる。しかし、正しいと思う道に向かって生きること、周りの人が勇気やパワーをもらい、あなたを応援してくれる。僕はあなたを応援します。そしていつでも相談に乗ります。がんばってね！」

顔も声も知らない方からの手紙だった。私は涙が止まらなかった。

「私は一人じゃないんだ。間違っていないんだ」

そう思った時、私の周りに応援してくれる誰かがいるかもしれないと、顔を上げられるようになった。そして私は私らしく生きぬこうと強く思うようになった。その手紙は今の私の原動力となって私を前に向かせている。